日本現代史の段階区分について

松田邦次

Divisions on Japanese Present History

Kuniji MATSUDA

序　　説

学問はおよそ，現実の反映であり，現実を解析し，変革するためにこそ存在理由がある．しかるに現実はその様相が誠に多岐にわたるものであって国が変われば法則（発展，生成，消滅）の発現もまた，恐ろしく異なった様相を示すものである．

日本の現実の資本主義の発展は日本特有の特長をもつ．私は日本資本主義の発達史，とりわけ，日本帝国主義の成立期に焦点を合わせて論じてみたい．

さて，帝国主義とは，いや帝国主義という現象をどのように説明すればよいであろうか．帝国主義という概念は，様々に用いられている．また，現代の帝国主義，過去の帝国主義という意味合いにおいても異にするのである．

帝国主義という語は，そもそも古代ローマ帝国，ナポレオンの帝国等，多くの異民族を含む広大な領域に対する強圧的な政治支配をさしたものであった．帝国主義という語については，資本主義の最高の発展段階，すなわち，独占資本主義の段階に達した時代である．

レーニンにおいては，帝国主義を次のような特徴をもっている経済国を帝国主義国家と定義付けている．

1. 資本と生産の高度な集中により，資本主義の本質的特徴である自由競争がなくなり，その反対物である独占へと転化すること．
2. 金融資本の出現であるとしている．すなわち独占的銀行資本が産業資本と結合することにより，金融資本となり，全産業をその寡占的支配の下に従属させるにいたること．
3. 産業資本主義段階での主要問題であった商品の海外輸出のほかに，新たに資本の輸出が始まり，それがより大きな意味をもちはじめること．
4. 国際カルテル，国際トラスト等の国際的独占体が形成され，世界的規模での市場分割が行なわれること．
5. 世界の領土的分割が一応完了し，その再分割をめざす資本主義列強間に戦争の危機が切迫すること．

ローザ・ルクセンブルグは帝国主義を次のように定義付けている．

帝国主義とは，世界のいまだ占領されていない非資本主義的地域の残部に関する競争戦であり，資本蓄積過程の政治的表現である．

シュンペーターは次のように定義付けている。

戦争の必要上つくられた機構が，いまやそれ自ら必要戦争をつくるものとなり，明確なる限度もなしにどこまでも広く征服しようとする意志，すなわち，統治されぬことが判りきった

土地でも略取しようとする意志，これが植民地政策にのっとった帝国主義だといっており，さらに彼は続けている．

守銭奴は，最初は，しかるべき理由があって金をためるのであるが，ある一定限度をこえると彼の蓄蔵癖にもはや合理性がなくなってしまう．現代の事業家にしても，もともとは生計を立てる必要故に，活動の習慣を身につけるのであるが，いったんその習慣が身についてしまうと，こんどはヘドニズムの立場からみて合理的意味がなくても，その活動をし続ける．これに似た現象は，生物の進化の中にもみることができる．まさに帝国主義はこの種の現象である．

デヴィッド・ランデスは次のように論じている．

帝国主義とは，単に勢力の不均衡から成り立っている共通の機会にたいする種々様々な反応としてみなければならないようにわたくしにはおもわれる．そのような力の不均衡があったばあいには，時と所とをとわず，国民や集団は，いつでもそれを利用しようとした．他人を小突きまわすこと，もしくは，ばあいによっては，他人の魂を救い，もしくは「教化する」ことは残念ながら，人間という動物の本性である．……と．

以上のような解釈は，正しいにせよ，正しくないにせよ，日本の帝国主義の意味付けにそっくりそのままあてはめることは断じてできない．世界の資本主義体制の諸国は，いろいろな程度の実力と独立性をもっており，その独自の体制下にあって帝国主義を形成しているのである．

日本帝国主義成立期の通論

1945年8月15日，この日をもって，日本帝国主義，古典的帝国主義は崩壊したことはまぎれもない事実である．

しかしながら日本帝国主義の成立の時期を明確にすることは困難きわまりない．この究明は諸学説をもっても不十分といわねばならないが．大体1906年～1907年，すなわち日露戦争直後に成立したというのが通説のようである．この理由は，日露戦争の勝利にともない極東における軍事上の独占的地位の確立と鉄道の国有化を契機として，国内における資本主義の独占化の傾向が急速に進んだという二つの理由にほかならないのである．

また1920年が日本帝国主義の成立期であるという論もある．しかしながら1920年が日本帝国主義の成立期であるという区分をもみとめない人も多いが日本資本主義もそれが資本主義である以上，資本主義の発展段階を経過していることはいうまでもない．しかし，日本のような後進資本主義国はかならずしも明確なる形で経過していないのは確かであるが，むしろそれが日本の資本主義の特殊性であったのである．

さて，論をもとにもどし，日本帝国主義の成立期が日露戦争後であるというのが通説だとし，また1920年とした．そして，日本も資本主義である以上資本主義の発展段階を経過した（必ずしも明確ではないが）ことも前述した．そこにおいて重要なことは日本も資本主義である以上，やはり世界史的な三つの段階を経過したとみるべきである．第1は重商主義段階，徳川期の後期，17～18世紀から1890年ごろまでと考えることができる．第2は自由主義段階，1890年ごろから1900年代までの時期．第3は帝国主義段階，日本では1907年にはじまる恐慌を契機としてはじまる．論を進めれば1906年～1907年の日露戦争直後に日本帝国主義が成立したとみるよりは，やはり日本帝国主義の成立は1920年とみるべきであり，世界史的にみても古典

的帝国主義の時期から国家・独占資本主義への移行をなす時期であり，相対的安定事項として特色付けるならばなお古典帝国主義の再建の時期であったと考えることができる．いずれにしても日本帝国主義の成立時期は1920年とみたほうがよいように思われる．またこの国家・独占資本主義への移行は，世界史的に1929年にはじまる世界恐慌を契機としてなされるのではあるが，後進資本主義国日本は，世界史の動きとはかなり時点を異にしているにもかかわらず，ここにきて完全なる一致をみることは注目すべきことである．これはいうまでもなく国家・独占資本主義が世界資本主義の危機の反映であり，すべての資本主義国が同じ危機にさらされたということができるのである．

私見による日本帝国主義の成立期

私は帝国主義の基本的なる条件として，生産および資本の集積集中，銀行の役割の増大，資本輸出，国際的独占体の形成，世界分割の完了という5つの条件によって帝国主義を定義付けることは理解できる．しかし，それぞれの国により前述した5つの条件にあてはめることに無理が生じてくる．なぜならば日本およびロシアの後進国のような帝国主義の成立は決して最高度な資本主義段階に達していたとは思えない．それぞれの国がそれぞれの特殊なる帝国主義を形成し，そしてある場合には近代的帝国主義とは余りにも異なった性格上の差異を考えなければならないと思うのである．

軍事力の問題と共に国際情勢をも一応は考慮する場合においてはなおさら5つの条件にあてはめることには無理が生じてくるのである．そしてまた帝国主義は資本主義の高度に発展した段階であるとするならば，資本主義がもっとも完全なる姿を現わしたのが自由主義段階であり，日本における自由主義時代は短期的，しかも不分明ではあるが1890年ごろから1900年までの若年であったことを前提条件とし，私見の日本帝国主義の成立期を論じてみることにする．

日本における帝国主義の成立期は日清戦争後．すなわち，1896年～1898年とみる．理由は次の如くである．

1. 日本は島国であり，資源もとぼしく，外国に目を向けねばならなかった．これが日清戦争という形になって現われたのである．この日清戦争の性格は資本の本源的蓄積と資本主義の発展にともなう国外市場にたいする経済的欲求が絶対主義国家権力と結合して起こしたものにほかならないと考える．この戦争の勝利により現代問題になっている台湾の植民地領有と，2億3千万両の償金と，中国港市の開放をもたらした．この港市の開放は最恵国約款によって世界帝国主義による中国分割の門戸を開けたのである．

2. 工業，交通，銀行の発展．

工業では繊維産業が他の産業にくらべて不均等に発達した．ことに紡績業では1889年～1898年の10年間に生産高は10倍にのびている．軽工業の発展にたいして重工業の発展は少なからず遅れたが，1901年，操業を開始した八幡製鉄所の設立はこの部門の夜明けとなった．

鉄道は国営のもとに急速に発達した．1889年～1898年の10年間に鉄道開業路線は約3倍にのびている．

銀行にしても国立銀行から普通銀行にかわり1889年～1898年の10年間に行数は約5倍にのび資本金は約10倍と増加している．

3. 輸出の上昇

輸出は1889年～1898年の10年間に約3倍にのびている．

4. 財政，金融

財政面においては，1889年～1898年の10年間において，一般会計歳入は2.2倍，歳出は約3倍になっており，そのカバーとして公債を発行している．また日清戦争の勝利に基づく償金により，金本位体制が確立され，国際経済との関連は大いに深まり外貨の導入がおこなわれるようになった．

5. 帝国主義的政治体制の整備

植民地政策にのっとる軍事面等の強化

以上5つの理由により私は日本帝国主義の成立を日清戦争後としたのである．この私見による成立の意味はミクロ的なる意味としてあえて使用した．

ここで論じたことは日本経済史のごく一部分にしかすぎぬ．21世紀に向かう我々にとって未来に目を向けることが大切であると同時に日本の歩んできた過去をもふり返ってみることも大切なことである．

参 考 文 献

1. 楫西光速・加藤俊彦・大島清・大内力（1964）日本における資本主義の発達・年表東京大学出版会.
2. 楫西光速（1962）日本資本主義発達史　有斐閣.
3. 大内力（1966）日本経済論上・下　東京大学出版会.
4. シュンペーター　都留重人訳（1968）帝国主義と社会階級　岩波書店.
5. 林　直道（1965）原典解説　帝国主義論　青木書店.
6. D．マッコンキィ　柴田徳衛訳（1965）独占資本の内幕　岩波新書.
7. 今井則義・宮崎義一・中村隆英（1966）現代日本の独占資本Ⅰ．至誠堂.